

櫻川昌哉「“円”国際化で日本は復活する」朝日新聞出版 2011年7月30日刊を読む

1. 勤勉さを活かした新しい高齢社会モデルを

(1) 今、日本の政治家に求められるのは、将来を想像する力である。

世界経済の形については、円、ユーロ、ドルの3つの国際通貨が共存するG8の体制を目指していく。

(2) この国際的な枠組み作りのために、日本政府は積極的な「通貨外交」を行う。

(3) 国のあり方については、新興国の経済発展を支えていくことで、見返りに世界の経済成長の果実を享受できるような金融システムを作っていく。そのために日本が持つ資金と技術を世界に供給する。

(4) こうしたイメージを頭の中に描きつつ、国民に訴えて実現させていかねばならない。

(5) その前提として「世界の利益と日本の利益を一致させることが日本の国益につながる」という認識を、国民と政治家が当然のこととして受け入れていかななくてはならない。

(6) もちろん、ものづくりの強さはそのまま活かしていけばいい。金融業が製造業かではなく、どちらでも稼げる新しい国家を目指すのだ。

(7) アメリカは金融は強いが製造業は弱い。中国は製造業が少しずつ力をつけていこうが、金融はまだ弱い。両方強い国はあまりない。

(8) 日本はこれだけ豊かになった今も、震災で東北が被災すると世界中が部品不足の影響を被るほど強い製造業を持っている。よく教育された労働力が豊富にあり、かつ世界最大の対外債権国として十二分な資金力もある。

(9) 勤勉さというのは我々日本人の持っている大切な資産だ。お金ができるとまじめに働かなくなるものだが、日本人には勤労の美德があり、それが金融ともものづくりを両立できる素地となる。

(10) 製造業と金融の両輪で稼ぐという新しいモデルを日本ならば実現できる可能性は大である。

(11) 国の方向をうまく変えていければ、世界に範を垂れることにもなる。というのも日本は高齢化の進行でも世界の先を行っているからだ。

(12) 資金的に維持可能な高齢社会をどのように構築していくか。無理に働かなくてもいいのだけれども、働きたい人はいくつまででも働ける。職があって、定年は60歳などとは言わず、70歳になっても働きたい人は働ける社会が望ましい。

(13) かつては「早くリタイアできることが幸せ」と言われてきた。それは実は労働が肉体的にきびしかった昔の話である。肉体的に苛酷だから、働かなくても良くなるのが喜びだったわけだ。

(14) しかし今は労働といっても知的労働の占める比重が増えてきており、年齢にかかわらずかなり高齢まで働くことができる。したがって「お歳を召した方は引退してください」と強制されるのではなく、高齢でもやる気があればいつまででも働き続けることができる社会が、我々日本人にとって幸せな社会なのではないか。

(15) いわゆる福祉国家を目指すのではなく、歳をとっても気持ち良く働ける社会を目指すべきだ。

(16) これは諸外国には真似ができない、目指すべき1つのモデルではないだろうか。

2. 未来を想像する力の大切さ

(1) 人々を動かすのは想像力である。

(2) 人は今まで生きてきた経験を基にしてしか将来を予測できない。だから理屈ではわかっているけど、今まで起きたことがないことはなかなか理解できないのだ。

(3) 残念ながら、多くの日本人は、政治家を含めて、財政破綻の怖さをまだ十分に認識できていない。自分の経験の範囲内では起きたことがなく、どんな状況になるのか想像できないから、そのリスクを過少に評価する。

(4) 経済理論を理解することのメリットは、現実の経済だけでなく、理論モデルを投影させて想像したもう1つのバーチャルな経済を“知る”ことである。歴史的な先例も知っているのも、日本の財政がこのまま進めばどのあたりで何が起きるということが、頭の中にだいたい想像できる。

- (5) 専門家以外の人が経済学者が持つイメージをどこまで信用してくれるかという問題はもちろんある。「私にはあなたに見えない世界が見えます」と言っても信用してもらうのは難しい。
- (6) 信じる信じないは個人の自由として、悲惨な結末が見えてしまうからには専門家としてはやはり「このままでは悲劇が起きる」と警鐘を鳴らし、人々の想像力に訴え続けるしかない。
- (7) 本書で私が「円の国際化という政策 1 つで日本経済に良い流れがやってくるのだ」と説いても、過去 20 年間低迷してきた日本の現実の経済しか知らない多くの人々は、半信半疑といったところかもしれない。
- (8) しかし自分が経験してきた範囲でしか物事を考えない限り、現状を打破することはできない。
- (9) うまくいっていない日本経済の現状をベースに、いろいろ小手先の対策を考えても、八方塞がりの状態に戻ってしまう。現状の日本経済が何が強くて何が弱いのか把握しないまま考えるからである。
- (10) 今は存在しないけれども、円が国際化できたとしたらどんな経済が生まれるだろうと想像を巡らし、そこから逆算して現在の日本経済を評価し直してみると違った姿が見えてくる。欠けているのは何かわかるから、その問題点を修正しながら進んでいけばいい。
- (11) 人々の力を結集していくためには、想像する力が大切だ。
多くの人が共通して思い描くことのできる未来像があれば、そこに向かって国民が力を合わせて進むことができる。そうなったときの日本国民の力は、世界中のどの国にも負けない。そうしたプロセスを実現させることこそ、政治の役割である。
- (12) これからの日本は、自らの明るい将来像を描いて、そこへ向かって進んでいけばいい。

P262 ~ 267

[コメント]

日本がこれだけ大変な状況になっているにもかかわらず、1 ドル 76 円台とこれだけ「円高」になると、通貨についての関心を持たざるを得ない。もっともっと強くなる円をどう活用するかを考えざるを得ない。「円高」を考えるということは、「円高」に耐えられる日本の「国の姿」「地方の姿」「企業の姿」を考えることだ。本書を、国や地方、企業、そして自分自身こととして 1 ドル「70 円」「60 円」「50 円」を考えるきっかけにしたい。